令和７年度

高等専修学校における多様な学びを保障する先導的研究事業
「都道府県との連携による高等専修学校機能強化の先導的モデル構築プロジェクト」

～県・地域企業との連携により企業関係者の積極的な学習への関りを通して
多様な学びに対応できる指導プログラムの構築～
実施報告



学校法人豊野学園　豊野高等専修学校

はじめに



豊野学園　ログハウスの杜　雪の朝

メタバーススクールゾーンがつくる、新しい学びのかたち

～一人ひとりが安心して挑戦できる“もう一つの学校空間”～

【選べる学び】＝主体性を育てる学校

本校では、メタバース上にもう一つのスクールゾーンを用意し
生徒一人ひとりが興味・関心に応じた課題を自ら選び
探究する学びを行っていきますます
「自分で選び、進路につながる学び」ができる学校を創ります

【安心してつながれる】＝居場所のある学校

アバターを介したコミュニケーションやカウンセリングにより
対面が苦手な生徒も安心して人と関われる環境を整えていきます
「学力より、まず心を守る学校」を創ります

【表現が評価される】＝美術・服飾など「ものづくり」に強い学校

生徒の美術作品や服飾作品をメタバース上に展示し
仲間と共に鑑賞・対話する体験を通して、表現する力と自信を育てます
デジタル空間での探究・制作・発表の経験は進学や専門分野、将来の
仕事に直結する力を育てます

本年度の委託事業においては、「スクールゾーン」「キャリアゾーン」の可能性について実践研究を行った。「スクールゾーン」について述べておきたい。

スクールゾーンでは期待できる教育効果として、教室をイメージした空間で、各自が興味ある課題を選び、解決していくこと、これはまさに、探究学習、PBL（課題解決型学習）、キャリア教育の最も中心となる部分である。この部分をさらに充実させることで、「やらされる学び」→「自分で選ぶ学び」への転換が可能となり、課題設定力・仮説思考・試行錯誤力が育つと思われる。

アバターでカウンセリングを受けるカウンセリングルームの設定は、心理的安全性の向上が期待でき、対面よりも本音を話しやすく、不登校傾向・不安の強い生徒の早期ケアにつながるとともに自己肯定感の回復にもつながり、顔・身体・声への不安が減るため相談するハードルを大きく下げられる。これは教育＋福祉＋メンタルヘルスの融合モデルとも言える。

コミュニケーション能力の段階的育成をはかるために、教室空間や展示空間での、アバター同士のチャット会話ができる場面を設定した。いきなり対面で話すのが苦手な生徒でも、文字チャット、アバター越しの会話からスタートできることにより、コミュニケーションへの恐怖心の軽減、SNS リテラシー・言語化力の向上・協働的学習の土台づくりが期待され、「孤立しない学校空間」をつくれることは意味が大きいと思われる。

展示ブースでは、自分の美術・服飾作品を、友達と一緒に鑑賞することで、表現への誇り・承認体験が生まれ、これはリアル展示よりも、場合によっては強力なものとなり、作品を「作品を体験として共有」できる。他者の視点・感想をその場で受け取れることから、自己肯定感の向上につながる。特に服飾は、実物では難しい「空間演出」「世界観提示」ができ、自己肯定感や創作意欲が高まると思われる。

以上より、総合するとこのスクールゾーンで育つのは、主体性・探究力、創造力・表現力、デジタルコミュニケーション力、心理的安定・自己理解、多様性理解（他者の価値観・表現の理解）文科省でいう、「非認知能力」や「21 世紀型スキル」を育むことができると考えられる。

今後の課題として、学びを「見える化」する（ポートフォリオ化）することが重要となり、メタバース内の活動を制作ログ、課題解決プロセス、展示履歴として蓄積し、デジタルポートフォリオ化していくことが必要と思われる。これは進学・就職・保護者説明用としての利用も考えられる。

さらに、学年・専攻を越えた「混ざる設計」（美術×服飾）（デザイン×IT）（先輩×後輩）が自然に交差するゾーンを作っていく必要がある。異年齢の縦割りの交流など、リアルでは難しい交流が、教育効果を一段引き上げることが考えられる。

一方「学校らしくない空間」をあえて残すことにより、放課後的な雑談ゾーン、作品を置きっぱなしにできる空間、何もしなくていい空間を残すと生徒の「居場所」になっていくものと思う。

将来的には、外部とつなぎ、外部クリエイターのアバター講評会、大学・専門学校のメタバースキャンパス訪問、企業課題をメタバース内で提示するなどにより、進路・社会と直結する学習空間にもなると思われる。

まとめると、このスクールゾーンは「学ぶ場所」ではなく「育つ世界」として位置づけたい。

令和8年度　2月吉日　　文部科学省委託事業統括長　山岸　建文

目次

はじめに

第一章　事業概要

１）事業の実施体制
２）学習ターゲット・目指すべき成果
３）本事業が必要な背景
４）現状の課題と改善のための取り組み
５）開発するモデルの概要

第二章　事業報告

企業講演実証講座
佐賀星生学園訪問研修
企業認知度調査
メタバース空間の構築

第三章　事業検証



事業概要

事業の実施体制
学習ターゲット・目指すべき成果
本事業が必要な背景
現状の課題と改善のための取り組み
開発するモデルの概要



県・地域企業との連携により企業関係者の積極的な学習への関わりを通して多様な学びに対応できる指導プログラムの構築

１）事業の実施体制

本校は、学びのセーフティネットとして、さまざまな困難やいきづらさを抱える生徒の学習機会を保障してきた。これまでの教育実践で得られた成果を基盤に、さらなる多様な学びの形としてメタバースを教育活動に取り入れ、学習環境の拡張と学びの質的変化を検証・評価することを本研究の目的とする。対面授業を主体とする現実空間と、メタバース上に構築された仮想空間を高度に融合させることで、生徒が安心して参加できる学習環境を整備し、学習意欲や社会的関係性の形成にどのような影響を与えるかを明らかにする。

本取組では、初年度は教師主導によりシステム構築およびカリキュラム設計を行い、運用の安定を図る。その後、年次を追って企画や運営を生徒に委ねる割合を高めることで、生徒の主体性や自己決定を促進し、より生徒の実態に即した学びへと発展させることを目指す。こうしたカリキュラム変化の過程と成果を継続的に記録・分析し、学習成果、参加状況、心理的変化等の観点から評価を行う。

評価および検証にあたっては、長野県教育委員会学びの改革支援課、県民の学び支援課、次世代サポート課と連携し、他の不登校関連施設等と情報共有を行いながら、不登校生徒の実態や効果的な支援の在り方について多角的に検討する。また、本校を「多様な学びを保証する高等専修学校」と位置づけ、安心して自己表現ができる学習環境、良好な人間関係の形成、主体的な学習参加、知識や技能を獲得する喜びといった「学びのウェルビーイング」の創出を重要な評価指標とする。

さらに、地域の事業所や企業と連携したカリキュラムを運用し、メタバース上に設置するキャリアゾーンやスクールゾーンにおける学習成果発表を通じて、生徒の自己肯定感や社会的評価の向上を図る。長野県産業労働部や社会福祉関係機関、地域企業と協働し、企業理解と生徒理解を相互に深めながら、実体験と仮想体験を組み合わせた進路支援を行い、就業率向上を目指す。本研究で得られた知見は広く社会に発信し、同様の課題を抱える生徒・保護者・教育機関にとって有効なモデルとして還元する。

2）学習ターゲット・目指すべき成果

本研究の学習ターゲットは、発達障がいの特性を有する生徒や不登校経験のある生徒など、特別な支援を必要とし、さまざまな「生きづらさ」を抱える生徒である。これらの生徒は、自己肯定感や社会的自立への不安を抱えやすく、従来の画一的な学習や進路指導では十分な支援が行き届かない現状がある。

本校では、県および地域企業との連携を軸に、企業が求める人材像を踏まえた人材育成プログラムを構築し、生徒一人ひとりが自らの適性や強みを理解した上で進路を自己決定し、卒業後も社会に定着できる力を育成することを目指す。そのために、実社会とつながる学びを通して職業理解を深め、働くことへの具体的なイメージ形成を図る。

さらに、メタバースを活用した多様な学習環境を整備し、対面での学習に不安を抱く生徒にも安心して参加できる学びの場を提供する。仮想空間での創作・発表活動や協働的学習を通して、生徒が「自分らしさ」や「自分の強み」に気づき、将来に希望をもって豊かな未来を描ける人材の育成を本研究の成果目標とする。

3）本事業が必要な背景

長野県における不登校児童生徒数は年々増加しており、令和 4 年度には小・中学校で 5,735 人、高等学校で 949 人と、いずれも 10 年連続の増加となっている。あわせて、発達障がいを抱える児童生徒の増加や、二次障がいとしての不登校も大きな課題となっている。さらに、高校卒業後の「出口問題」も深刻であり、長野県内の通信制高校卒業生の約 3 分の 1 が無業者であるとの報告があり、他の高校においても同様の傾向が推測される。就職後の離職率の高さも含め、進路・就労支援の充実が強く求められている。

本校における不登校経験者の在籍率は、近年 50～60%台で推移しており、支援を必要とする生徒の割合も高い。令和 5 年度の 3 年生では、精神・療育手帳所持者が 10.4%、発達障がいの診断がある生徒が 48.8%、精神系服薬を行っている生徒が 28.6%と、多様で専門的な支援を要する実態が明らかとなっている。本校では、教育の実際や課題を家庭・地域に公表し意見を求める取り組みを通して、改善すべき点と成果を可視化してきた。

その結果、本校入学時には平均 57%であった不登校経験者の割合が、3 年次には近年 1 割程度まで改善している。これは、中学校から円滑に移行できる体制づくり、マナー講座、SST・LST の導入、外部講師による講座、教育相談体制の充実、校外学習の拡充、さらには支援機関や企業との産学連携の成果であると考えられる。一方で、今後は産学連携に加え、産学官連携を一層強化し、より充実した支援体制の構築が必要である。

また、長野県ではフリースクール認証制度が始まっているが、子どもの自主性を尊重しつつ学びの質をどのように担保するかが重要な課題である。本校は「学校らしさ」と「学校らしくなさ」を併せ持つ実践を行っており、不登校生徒の新たな学びのモデルとしての役割が期待される。しかし、高等専修学校の認知度は依然として低く、県教育委員会や行政と連携した情報発信が不可欠である。

さらに、卒業後の就労支援と離職率低減に向け、長野県産業労働部や企業と連携し、企業理解と生徒理解を相互に深める取り組みを進める必要がある。合同企業説明会や企業人による授業参加の機会を設け、地元企業の魅力を伝えるとともに、適切なマッチングを図る。不登校傾向の生徒に対しては、これらの取り組みをメタバース空間でも提供することで、登校が困難な生徒にも等しく情報と機会を保障するモデルの構築を目指す。

４）現状の課題と改善のための取り組み

本校では、不登校生徒を含む多様な学びのニーズに対応した教育を実践しているが、行政や地域社会における高等専修学校への認識不足が課題となっている。特に行政担当者との情報共有や協議の場が十分に確保されていない点が現状である。そこで、次世代サポート課および県民の学び支援課と連携し、不登校問題を中心とした協議会を設置し、本校の指導内容や実践事例を提示しながら意見交換を行う。

また、本校の認知度調査は中学校を対象に実施してきたが、地元企業に対する調査は未実施であった。このため、株式会社戦略デザインラボと連携し、企業における本校の認知度および企業が求める人材像について調査を行う。調査結果を基に、企業関係者による授業参観やホームページ閲覧後の意見聴取を行い、情報発信の在り方を検討する。加えて、公式インスタグラムを活用し、教育活動の可視化と発信力の強化を図る。

さらに、生徒の職業理解の不足を改善するため、地域の優良企業経営者を招いた講話を総合的な学習の時間に実施し、質疑応答を通して地元企業への理解を深める。加えて、生徒の成果発表の場として、STEAM 教育の一環でメタバース空間を活用した作品展示・発表を行い、不登校支援にも活用可能な新たな学習・支援手法を検討し、その効果を数値化することを目指す。

５）開発するモデルの概要

本校では、県および地域企業との連携を軸に、不登校生徒を含む多様な学びのニーズに対応した教育実践を進めてきた。令和 6 年度には、長野県教育委員会学びの改革支援課、県民文化部こども若者局次世代サポート課、県民の学び支援課と連携し、不登校問題に関する情報交換および事業評価委員会での意見交換を実施した。行政の多角的視点を取り入れることで、不登校問題解決に向けた新たな示唆を得ることができ、次年度以降も継続的な協議を進める方針である。

また、令和 6 年度には、企業・行政・学校関係者が交流する機会を設け、相互理解を深めることで、生徒の新たなキャリア形成や就労につながる可能性が確認された。地元企業の経営者や社会人を招いた実証授業では、企業の特色や求められる人材像、人としての在り方について学ぶ機会となり、令和 7 年度以降も継続実施を予定している。さらに、株式会社戦略デザインラボを中心とした企業グループとの連携により、生徒の実態理解と企業とのマッチング可能性を探る取り組みや、企業人講師による授業参加を通して、地元企業の魅力を知る学習機会を創出した。今後は、地域単位での人材育成・定着支援を目的とした生徒向けビジネススクールの実施も検討している。

一方、メタバースを活用した教育モデルについては、令和 6 年度に本校をフィールドとして「教育のウェルビーイング」の新たな方向性を探る事業化を行った。ここでいう教育のウェルビーイングとは、安心して自己表現できる学習環境、良好な人間関係、主体的な学びへの参画、学ぶ喜びの実感を含む概念である。近年、生徒の多くが対人関係や自己開示に不安を抱える中、チャットや文字を通した表現には抵抗が少ない傾向が見られることから、オンラインで教室内外をつなぐバーチャルコミュニケーション空間の有効性に着目した。

令和 7 年度以降は、高等専修学校の専門性を活かしたメタバース空間を構築し、アバターによる自由な学習参加を可能とすることで、ストレスの少ない学習環境の実現を目指す。スクールゾーンでの学習コミュニティ形成や成果物の公開に加え、キャリアゾーンによる学外への学びの提供、社会や企業との連携、さらには生徒自らが生み出すカリキュラム構築へと段階的に発展させる計画である。誰一人取り残さない柔軟な学びの仕組みを定着させるとともに、学習コンテンツを地域に開放し、リスキリングや学び直しのニーズに応える教育拠点としての役割を果たすことを目指している。

事業報告

企業講演実証講座
佐賀星生学園訪問研修
企業認知度調査
メタバース空間の構築



1)企業講演実証講座

1. 目的

実際に社会で働く方を講師として学校に招き、職業観・勤労観の形成を目的とした企業講演実証講座の実践を通して、生徒の意識変容や学習効果を明らかにすることを目的とする。特に、多様な職業分野の講師による講話が、生徒の将来設計や自己理解にどのような影響を与えたのかを検証する。

---

2. 実証講座の授業者

小嶋小百合　氏(ケアビレッジ銀乃扇　代表／介護・保育施設経営者)
長崎航平　氏(宿泊・飲食拠点運営、地域編集・まちづくり実践者)
丸山真一郎　氏(木の実クラフト作家)
篠塚公治　氏(合同会社ひと葉　代表／教科書・資料集編集者)
関谷優　氏(合同会社 N’s Creative 代表)

---

3. 各講座の実践内容

(1)介護・保育分野における
「その人らしく生きる」支援

講師:小嶋小百合　氏

介護と保育を融合した施設経営の実践を通して、高齢化社会における人との関わり方や支援の在り方について講話が行われた。自立と自律の違い、助けを求める力の重要性、人生経験を肯定的に捉える姿勢が語られ、生徒は「働くこと＝人の人生に関わること」であると理解を深めた。

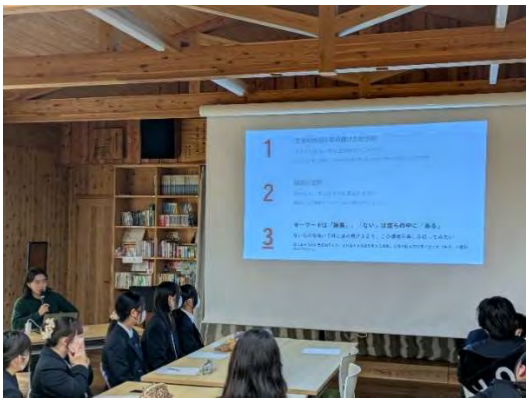


---

(2)地域を「編集する」という新しい働き方

講師:長崎航平　氏

海外経験や放浪生活を経て、地元で事業を立ち上げた経験をもとに、価値は外にあるのではなく「見方を変えることで生まれる」ことが示された。町全体を宿に見立てる発想は、生徒にとって職業の多様性や地域で生きる選択肢を考える契機となった。



---

(3)自然と関わる仕事とものづくり体験

講師:丸山真一郎　氏

木の実を使ったリース制作を通し、自然資源を生かした仕事の魅力が伝えられた。行政職からクラフト作家へ転身した経緯や、過去の経験が現在の仕事につながっている点が強調され、体験的活動を通じて「好きなことを続ける価値」を学ぶ機会となった。

（4）教科書編集の仕事と社会への責任
講師：篠塚公治　氏
教科書・資料集編集の具体的な仕事内容や、会社員から起業に至る過程が紹介された。働くことのやりがいと困難さ、社会や政治との関係にも言及され、生徒は職業選択を個人の問題だけでなく、社会全体との関わりとして捉える視点を得た。

（５）地域と SNS を軸にした仕事づくり
講師：関谷　優　氏
関谷氏は自身の挫折や独立経験をもとに、SNS は情報発信ではなくファンをつくる場であると語った。失敗を恐れず挑戦し、想いを語り続けることで仲間や仕事が生まれること、明るく前向きな姿勢が人を引き寄せることを学び、生徒は働くことの意味を深く理解した。



4. 生徒の反応と学習成果

・北海道でのお仕事の話には驚きました。どんなリスクがあっても仕事をし続けなければいけないのは、本当に聞いているだけでしんどかったです。でもそれを本当にやっている北海道の酪農家の人たちは本当にすごいなと思いました。
・自分は明確に夢があるわけじゃないけど、誰かに頼られる人になりたくて、でも頼られる人になるにはそういう人にならなきゃいけないし、なるには経験が大切だし先は長いと思うけど、それも何かの制約と誓約の一種と思って、頼られる人になりたいという思いで自分を縛ることで 1 本の筋ができ頑張れるのかなと思いました。
・自分のやりたいこととかを見つけるのは大変だと思った。そのぶん自分がやりたいなと思っていることをやればいいなと思った。まだそんなに決まっていないからわかんないけど、自分のやりたいことを見つけられればいいなと思った。
・生まれ育った場所を否定するということはその場所で生きてきた自分を否定することになるという言葉が、地元愛を感じました。私も地元が大好きです。何もなくても自分で生み出せる、そんな人になりたい。
・自分が出会ってきた人の平均値で自分が形作られるです。今まで自分に関わってくれた方々一人一人が今の自分にとってかけがえのないものなのだなと考えることができる言葉でした。
・話を聞いていて、失敗や辛かったことの話などが沢山出てきたけどそれをのりこえて自分で起業したのがすごいなと思いました。私も美容師になりたいという夢を持っているので失敗を恐れないで一生懸命頑張ろうとおもいました。
・私自身介護士を志しているので、介護施設と保育園が一緒になっているといった珍しい施設もあるのだと驚きました。1 つの施設でご年配の方と子供達が隔たりなく一緒に過ごしたり、仲良くなれたり出来ることが素敵だと思いました。
・私は介護を学んでいて介護に興味をもっていたけど自分が本当に介護をやりたいのか悩んでい

たんですけど今回の話を聞いてみて高齢者の人の最期まで自分らしく生きることや高齢者とこう接したらいいなど介護について詳しく知ることができて介護をやりたいという気持ちがもっと高まったし私も最期まで自分らしく生きてほしいから介護という職業は私に向いているし介護という職業をやりたいんだなって思いました。
・色んなことを経験していくことだったり、人と人との繋がりや関わりだったりその人の気持ちやその人らしく生きていくことが大事なんだなと感じました。貴重なお話や体験談ありがとうございました。
・資料集が分かりやすく作られているのは、編集の方が何度も試行錯誤を重ねているからだと分かり、とても驚きました。お話を聞いて、ひとつの本ができるまでの道のりの長さや、仕事への情熱を強く感じ、自分も物事に真剣に向き合う姿勢を大切にしたいと思いました。
・印象に残っている事は 起業したきっかけのお話です。 務めていた会社をやめた後、就職活動が上手くいかない時、私なら起業しよう！と思わないと思いましたし、諦めずに、また自分のやりたい事を叶えていく姿がとてもすごいと思いました。
・思っていたよりもたくさんの苦悩があった事を知り、生きていく大変さや現実味を知れました。私も、もし辛くて辞職したとしても、また新しく職を探して、より自分に合った職業を見つけられるような人生を生きたいと思います。
・投票の重要性、その意味を知り、選挙権を得たら投票に行かなければと危機感を抱きました。自分の世間知らずもところどころ感じて、もう少しニュースを見る、両親など大人の話に耳を傾けるべきだと考えました。
・余っているものは自分のセンスだけど、自分なりに余っているみをつけることが出来ました。グルーガンでつけました。とても楽しくリースを作ることが出来ました。ありがとうございました。とてもいい思い出になりました。
・まず、クラフト作家の丸山さんが県庁の仕事をしていた人だったということが意外だった。でも山林関係の仕事や知識が今のクラフト作家につながっていて材料の木の実の知識にもつながっているんだと思った。
・すぐにクラフト作家になれなくても、興味を持って生活していくと出会いが生まれ、自分のやりたい仕事につながっていくことがあるとわかった。

生徒の感想からは、以下のような変容が確認された。
講師の実体験に触れることで、失敗や困難を前向きに捉える姿勢が育まれた
職業は一つの正解ではなく、多様な生き方の延長線上にあることを理解した
地域・人・社会とのつながりを意識し、自身の将来を主体的に考える姿勢が見られた
特に「今を大切に生きること」「身近なものの価値を見直すこと」といった視点は、複数の講座に共通しており、キャリア教育として高い教育的効果があったと考えられる。

---

5. 考察とまとめ

本実践を通して、実際の社会人による講話は、生徒にとって職業理解のみならず、自己理解や生き方を考える重要な学習機会となることが明らかになった。今後は、事前・事後学習の充実や、教科との関連付けを図ることでより体系的なキャリア教育へと発展させていく必要がある。

2）佐賀星生学園訪問研修



1. 目的

佐賀星生学園での研修を通して、不登校支援、学校づくり、教育理念の具体的な実践方法について検討し、その成果と特徴を明らかにするとともに、豊野高等専修学校の教育改善に資する示唆を得ることを目的とする。星生学園は「教育のユニバーサルデザイン化」を掲げ、不登校や発達特性のある生徒を主な対象とした教育実践を行っており、解決志向アプローチ（Solution Focused Approach：以下 SFA）を全教職員で共有している点に大きな特徴がある。

---

2. 学校理念とグランドルール

星生学園の教育理念は、「弾力のある人間性を育てる教育のユニバーサルデザイン」である。この理念を学校生活全体に浸透させるため、生徒・教職員が共通して守る三つのグランドルールが設定されている。

①人と物を大切にする、②人と比べない、③自分の限界を自分で決めない

である。問題が生じた際には、このグランドルールに立ち返り、行動を振り返る文化が定着しており、理念と実践の一貫性が保たれていた。

---

3. 学習環境と心理的安全性の確保

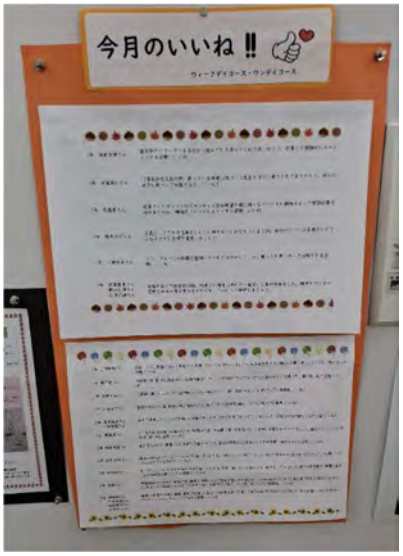
新設された校舎は、生徒の心理的安全性を重視した設計となっている。天井の高い開放的な空間、教室正面に配置された職員室、廊下に設置された個別机やベンチなどにより、教室に入ることが難しい生徒にも複数の居場所が用意されていた。また、リソースルームを設置し、パーテーションによって個別空間を柔軟に確保できる構造とすることで、生徒がその日の状態に応じて学習環境を選択できる点が特徴であった。

---

4. 不登校支援を支える教育プログラム

（1）解決志向アプローチ（SFA）

星生学園では、支援の基盤として SFA を導入し、「できていること」や「望ましい未来」に焦点を当てた関わりを行っている。教職員個々の経験や力量に依存しない、一貫性のある支援体制が構築されていた。



（2）チャレンジワーク（縦割り活動）

学年混合のグループによるチャレンジワークでは、ダンスや演劇、デザイン等に約 7 か月間取り組み、文化祭で成果を発表する。明確な目標設定と学年を超えた協働が、生徒の社会性や自己表現力の向上に寄与していた。

(3)ワンデーコース
通信制課程の課題を補完するモデルとして、独自のレポートおよび単位認定試験を導入している。登校し授業に参加することで学習が成立する設計とし、登校習慣の定着を重視している点が特徴であった。
(4)検定を活用した学力形成
漢字検定、文章読解検定、日本語検定等に級にこだわらず挑戦させ、成功体験を積ませている。併せて、教研式新学年別知能検査「サポート」を年１回実施し、学力の定点観測と改善状況の把握を行っていた。

---

5. 視察から明らかになった星生学園の強み
第一に、教育理念と実践が高度に一致している点である。第二に、小さな成功体験を意図的に設計し、自己肯定感を高める仕組みが多層的に用意されている点である。第三に、施設設計を含め、生徒の状態を前提とした心理的安全性の高い学習環境が整備されている点が挙げられる。

---

6. 自校への示唆と今後の課題
本視察から、SFA に基づく声かけの共有、検定の段階的導入、グランドルールの明確化、レポート課題の柔軟な設計、生徒の表現機会の拡充などは、自校においても導入可能であると考えられる。今後は、理念を明確にし、教職員間での共通理解を深めながら、実践へとつなげていくことが課題である。

---

7. まとめ
星生学園の実践は、理念・環境・支援方法が一体となった学校づくりであり、不登校支援における有効なモデルを示している。本研究で得られた知見を基に、自校においても「安心できる学習環境」と「成功体験を重ねる教育」の構築を進めていきたい。

研修報告レポート



＜一学年主任　吉澤孝志＞
本研修は、文部科学省が示す COCOLO プランにおける「学びのセーフティーネット」としての学校の役割に着目し、その実践と地域への周知の在り方について、佐賀県の私立高等専修学校・星生学園の取組から学び、本校の学校運営に生かすことを目的として実施した。特に、不登校や発達特性のある生徒を多数受け入れる学校として、星生学園がどのような理念と経営方針のもとで教育実践を行

っているのかを、本校との比較の視点から検討した。

視察では、生徒構成における不登校経験者や特性のある生徒の割合、実際の授業の様子、地域における学校イメージの定着方法、心理学的アプローチ（SFA）を学校運営全体に浸透させる方策、教育活動の成果を数値で示す学校経営、検定を重視した学力形成の在り方などについて説明を受けた。星生学園では「マイノリティーも集まればマジョリティー」という理念のもと、教育のユニバーサルデザイン化を掲げ、すべての教育活動にソリューション・フォーカスト・アプローチ（SFA）を取り入れている点が大きな特徴である。

生徒の実態としては、不登校・不登校傾向および高校中退経験のある生徒が 71.0%、発達障害等の特性のある生徒が 65.3%を占めており、重複を考慮すると約 8 割の生徒が何らかの困難を抱えて入学していると考えられる。その中で、不登校傾向が改善した生徒は 87%に達し、2024 年度において不登校を理由とする退学者は 0 人であった。これらの成果は、中学校進路指導担当教員の間で「不登校や特性のある生徒に適した学校」という明確な学校イメージとして定着している。

学力面では、漢字検定、文章読解・作成能力検定、日本語検定などを積極的に導入し、社会的自立に必要な言語能力の育成を重視している。また、教研式新学年別知能検査「サポート」を年 1 回実施し、学力（知的水準）の定点観測を行っており、知的水準の低位層の割合が 24 か月で大きく減少するなど、客観的な数値による成果検証が行われている点も特徴的であった。加えて、授業参加が難しい生徒に対しては、廊下やリソースルームを活用し、物理的・心理的距離を調整した学習環境が整えられていた。

本視察から得られた最大の示唆は、理事長が校長を兼任し、学校の理念と経営方針が教職員間で強く共有されている点である。生徒に対しては「人と物を大切にする」「競争しない」「自分の限界を自分で決めない」という価値観を入学時から明確に伝え、教職員も同じスタンスで関わり続けている。本校においても、言語能力育成を目的とした検定の導入や、学力の定点観測による学校経営の可視化、心理学的視点を基盤とした共通理解の形成など、今後の学校運営に取り入れるべき点が多く示唆された。



＜教諭　平沢祐里＞

本研修では、自校と多くの共通点をもつ佐賀県の星生学園で研修と意見交換をし、不登校支援の具体的実践、不登校からの回復を支える教育プログラム、ワンデーコースの仕組み、ならびに新設校舎の教育的意図について学ぶことを目的とした。特に、不登校の背景が複雑化する中で、「なぜ学校に行けないのか」という根源的な問いに向き合い、解決志向を基盤とした学校づくりがどのように行われているのかを重点的に理解することができた。

星生学園は、「教育のユニバーサルデザイン」を理念に掲げ、弾力のある人間性の育成を目指している。新設された平屋建ての校舎は、生徒の心理的安全性を最優先に設計されており、高い天井と十分な採光による開放的な空間が、生徒の不安軽減と活動意欲の向上につながっている。職員室と教室を近接させた配置や、廊下・ベンチ・カフェテーブルなど多様な居場所の確保、可動式パーテーションによる多目的空間の活用、学年を越えた関係性を育みやすい平屋構造など、環境面からの不登校支援が徹底されていた。また、リソースルームを設置し、教室に入りにくい生徒への柔軟な対応や、専門相談員による支援体制が整えられている点も特徴である。

不登校支援の中核には、ソリューション・フォーカスト・アプローチ（SFA）を用いた「解決志向アプローチ」がある。できない点ではなく、できている点や強みに着目することで、生徒の自己肯定感を育てる支援が全教職員に共有されている。特に、「人と物を大切にする」「競争しない」「自分の限界を自分で決めない」という「3 つの約束」を行動規範として明文化し、生徒・教員双方が立ち返る軸としている点は、自校にとっても重要な示唆であった。

具体的な取り組みとして、縦割りグループによる「チャレンジワーク」では、文化祭での成果発表を目標に約 7 か月間活動を継続し、達成感や他者との関わりを育んでいる。また、土曜ワンデーコースでは、独自レポートと単位認定試験を導入し、「学習」よりも「登校」に主眼を置いた仕組みにより、継続的な通学を促している点が大きな特色である。

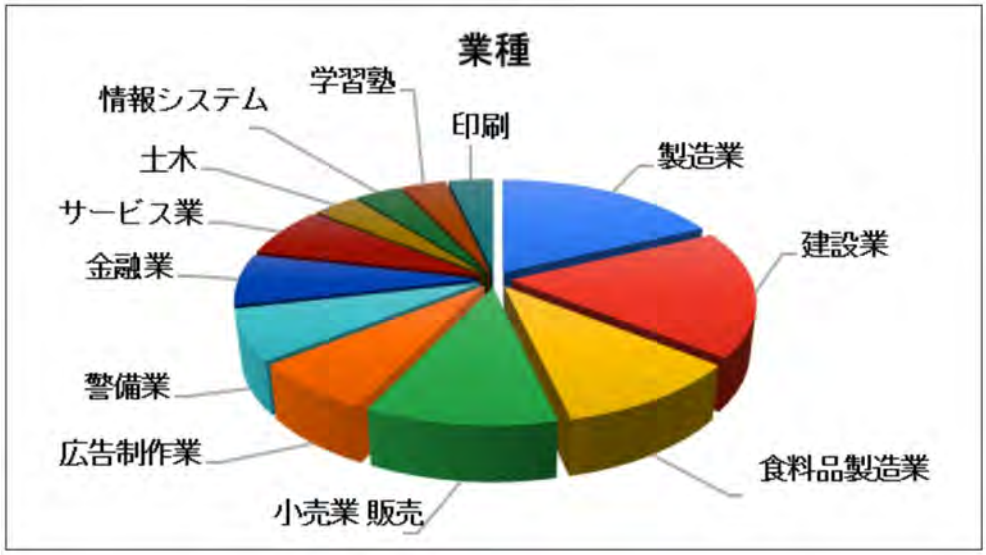
今回の視察から、不登校支援には、生徒が安心・安全を実感できる環境づくりと、成功体験を積み重ねられる柔軟なプログラムの両立が不可欠であることを再認識した。今後、自校においても、教職員間の指針共有、学校としてのブランド価値の再構築、授業形態の改善などを検討し、教職員の負担軽減や人材配置にも配慮しながら、持続可能な不登校支援体制の構築を進めていきたいと考える。





３）企業認知度調査

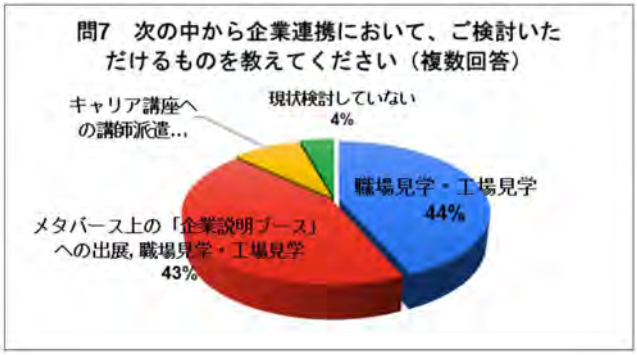
アンケートの目的：地元企業の豊野高等専修学校に対する認知度調査
実施期間　：令和７年１１月～令和７年１２月
対象者　　：無作為に選定した地元企業１８０社
実施方法　：アンケートの趣旨目的を明確にしたお願い文書とアンケート用紙を郵送
　　Google Form にて回答を回収

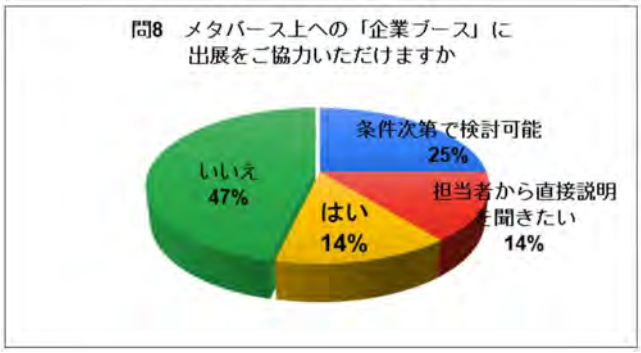


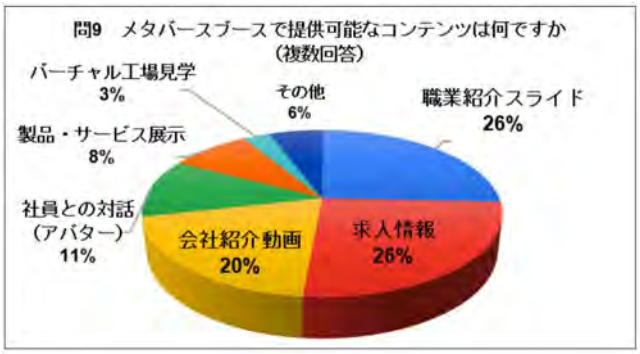
調査結果

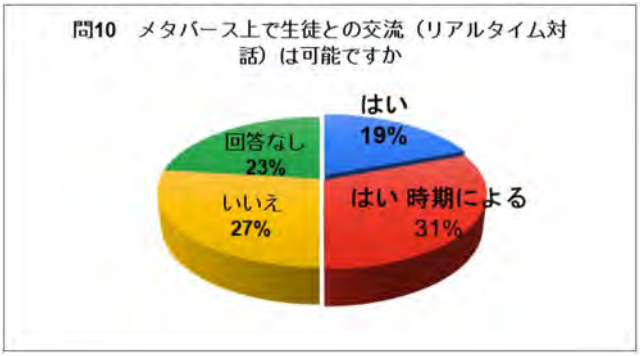
	令和６年度		令和７年度	
質問内容	はい	いいえ	はい	いいえ
問１　専修学校という学校種の認知	92%	8%	79%	21%
問２　専修学校における課程区分の認知	42%	58%	59%	41%
問３　豊野高等専修学校の認知	46%	54%	72%	28%
問４　高等課程の各コースの認知	25%	75%	49%	51%
問５　専門課程の各コースの認知	25%	75%	41%	59%

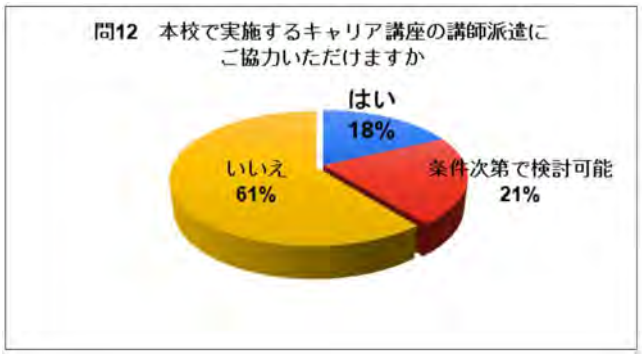
高等課程にある各コースとは、生活服飾コース、生活情報コース、生活美術コース、生活介護コース
専門課程にある各コースとは、服飾デザインコース、情報デザインコース

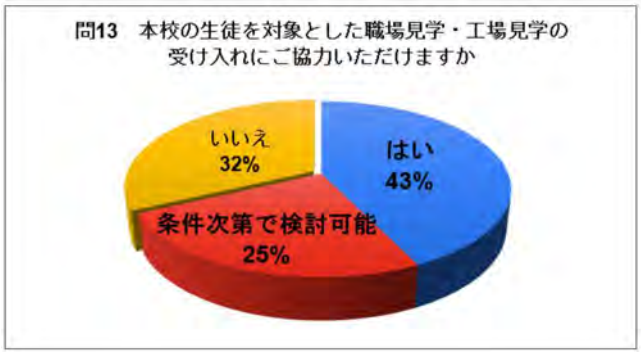


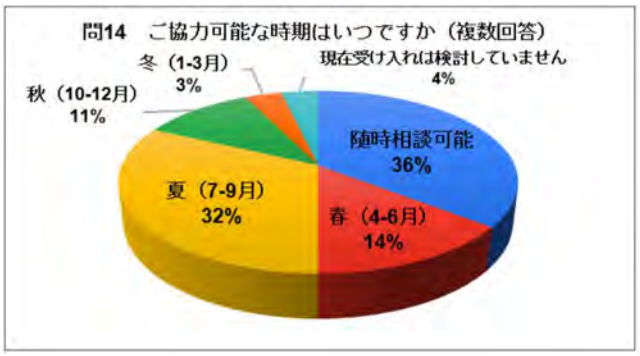


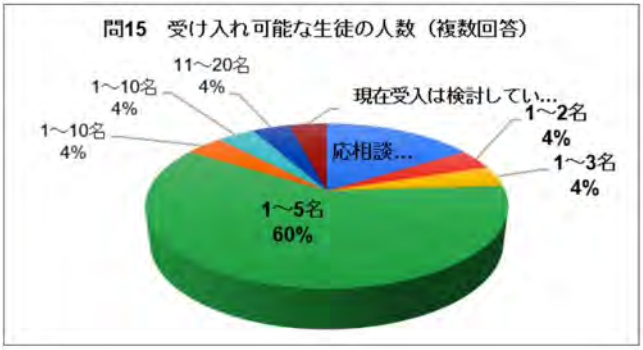


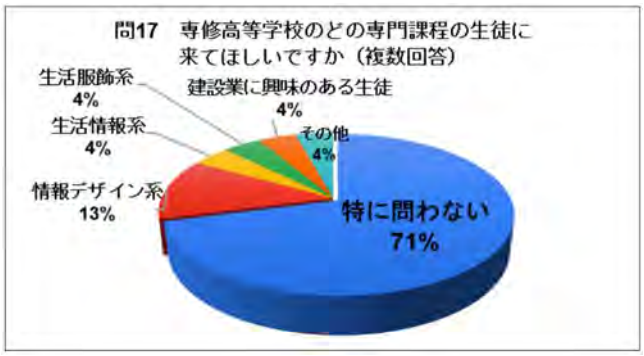


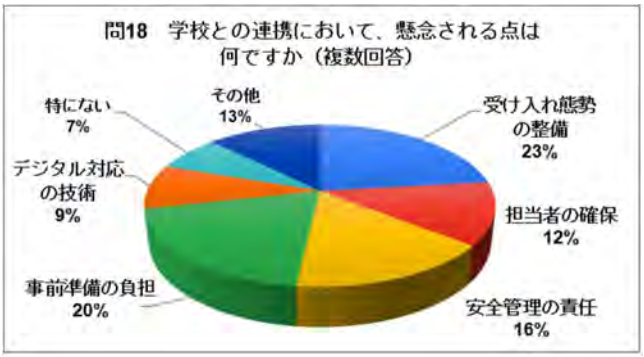












調査結果の考察、課題及び今後の対策について

1. 調査結果の概要

本調査は、令和 6 年度および令和 7 年度における専修学校および豊野高等専修学校に関する認知状況について把握することを目的として実施したものである。調査結果から、学校名の認知度は向上している一方で、専修学校制度や各課程・コース内容の理解については、依然とし

て十分とは言えない状況が明らかとなった。

---

2. 調査結果の考察

(1)専修学校という学校種の認知(問 1)

「専修学校」という学校種についての認知は、令和 6 年度の 92%から令和 7 年度には 79%へと低下している。依然として高い水準ではあるものの、年度による変動が見られることから、対象者の入れ替わり等により、制度そのものの理解が必ずしも定着していない可能性が考えられる。

(2)専修学校における課程区分の認知(問 2)

「高等課程」と「専門課程」があることを知っている割合は、令和 6 年度 42%から令和 7 年度 59%へと大きく上昇している。このことから、専修学校制度に関する情報提供や説明の機会が一定の成果を上げていると考えられる。

(3)豊野高等専修学校の認知(問 3)

豊野高等専修学校を知っている割合は、令和 6 年度 46%から令和 7 年度 72%へと大幅に上昇しており、学校名の認知向上については、広報活動等の効果が明確に表れている。

(4)高等課程および専門課程のコース認知(問 4・問 5)

高等課程の各コース認知は 25%から 49%、専門課程の各コース認知は 25%から 41%へと、それぞれ改善が見られる。しかしながら、いずれも「はい」が 5 割未満にとどまっており、学校名は知られていても、具体的な教育内容やコース構成についての理解が十分に浸透していない状況がうかがえる。

---

3. 課題の整理

本調査結果から、以下の課題が明らかとなった。

専修学校制度そのものの理解が年度によって変動しており、継続的な周知が必要であること。

豊野高等専修学校について、学校名の認知と教育内容の理解との間に乖離が見られること。

高等課程および専門課程における各コースの内容が、進路選択に結びつく形で十分に伝わっていないこと。

特に専門課程については、高等課程に比べて認知度が低く情報発信の不足が課題であること。

---

4. 今後の対策

今後は、以下の点を重点的に取り組む必要がある。

(1)専修学校制度および課程区分に関する説明の充実

「専修学校とは何か」「高等課程・専門課程の違い」について、毎年度継続して分かりやすく説明し、制度理解の定着を図る。

(2)学校の特色を明確にした情報発信

学校名の周知にとどまらず、学べる内容や育成する人材像、進路実績等を明確に示し、「どのような学校であるか」が具体的に伝わる広報を行う。

(3)コース内容の具体化と可視化
各コースについて、授業内容、取得可能な資格、卒業後の進路などを具体的に示し、写真や体験事例等を活用した分かりやすい情報提供を行う。
(4)専門課程に関する重点的な周知
専門課程の特徴や高等課程との違い、進学・就職の実績等を明確にし、対象者が将来像を描きやすい情報発信を強化する。

---

5. まとめ

本調査により、豊野高等専修学校の認知度は着実に向上していることが確認できた。一方で、専修学校制度や各課程・コースの具体的内容については、さらなる周知と理解促進が必要である。今後は、制度理解の定着と教育内容の具体的な発信を通じて、進路選択の一つとしてより実効性のある情報提供を行っていくことが求められる。

訴求対象者を明確にした広報




中学生、高校生、保護者様、先生方へ
豊野で「君の未来」が変わる
「好き・得意」を学び仕事につなげる
～最強の武器（スキル×大卒）を手に入れよう～
ＡＩが当たり前の時代。ただ使う側で終わるか、創り出す側になるか？
豊野学園の新しい学びは「君の夢中を社会で生き抜く力」に変えます。
洋裁コース
和裁コース
「服をつくる」ってすっごく楽しい！
生活服飾コース
社会で役立つ情報技術を習得する！
生活情報コース
生活美術コース
個性を活かして創作にチャレンジする！
生活介護コース
時間をかけてゆっくり学べる！
アドバンストコース】
専門課程＋大学)】
(高度)専門士


ものづくりに興味がある全ての方へ
手仕事のぬくもりを
デジタルの精度で
信州の伝統工芸×最先端テクノロジー
ここでしかできない「ものづくり」がある
針と糸で紡ぐ、千年の歴史。データと機械が描く、未来のフォルム。
豊野学園は、その両方を知る「次世代の職人（アルチザン）」を育てます。
01.最高峰の指導
大学教授による特別講義
デザイン理論や繊維工学など、アカデミックな視点からものづくりの奥深さを学びます。
感性だけでなく、理論に裏打ちされた制作力を養います。
03.基礎の徹底
「運針」から「ドレス制作」まで
すべての基本は、一本の針と糸から。基礎的な運針を徹底して習得した後、徐々に複雑なドレスや着物の制作へ。自分の手で「ゼロから形にする」喜びを知ります。
を、見に来てください
学園文化祭・作品展
物、ドレス、デジタル作品が一堂に会します。
を使った「バーチャル展示」も体験できます。
月頃（詳細はWebで）
ス・学校情報】
なの鉄道北しなの線「豊野駅」より徒歩3分
Webサイトで作品ギャラリーを見る

4）メタバース空間の構築

1. 研究背景・目的



近年、不登校傾向にある生徒の増加が社会的課題となっている。不登校の要因には、人間関係への不安、対面コミュニケーションへの心理的負担、学校空間そのものへの抵抗感などが挙げられる。
そこで本研究では、メタバース空間を活用した新たな交流の場を構築し、不登校傾向にある生徒が、通常登校している生徒と心理的負担の少ない形で交流できる環境を提供することを目的とした。
本メタバース空間では、
①匿名での参加が可能
②現実世界での立場や属性が可視化されない
③アバターを介した間接的なコミュニケーション
といった特徴を持たせることで、生徒同士が「誰であるか」を意識せず、純粋に対話や活動を楽しめる環境の実現を目指している。

2. メタバース空間の全体構成

今年度は、交流の目的や学習段階に応じて、以下の 3 つのゾーンを設計・構築した。
①クリエイトゾーン（ギャラリー）
②スクールゾーン
③キャリアゾーン
それぞれのゾーンには異なる役割を持たせ、生徒が段階的に社会性や自己表現力を高められるよう設計している。

3. 各ゾーンの概要とねらい

---

① クリエイトゾーン（ギャラリー型）

クリエイトゾーンは、生徒が制作した作品を展示・共有するためのギャラリー型メタバース空間である。展示内容は、イラスト、文章、写真、3D 作品など多様な表現を想定している。





ねらい

不登校傾向にある生徒の中には、対面での会話や自己主張に強い不安を感じる一方で、創作活動を通した自己表現には意欲を示す生徒も多い。クリエイトゾーンでは、言語的なやり取りに

依存しない交流を可能とし、「話さなくても参加できる居場所」を提供することを目的としている。

【生活美術コース展示室】

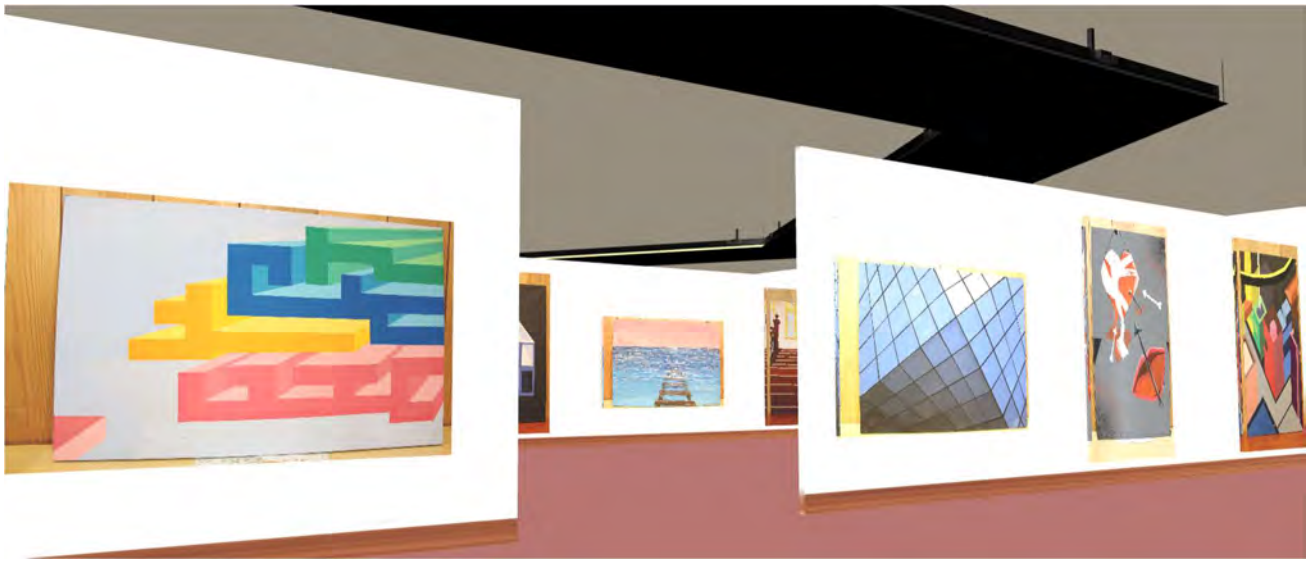
●「金屏風」デザイン展示室●



●「竹灯籠」デザイン展示室●



●「立体造形（クレイモデル）」デザイン展示室●

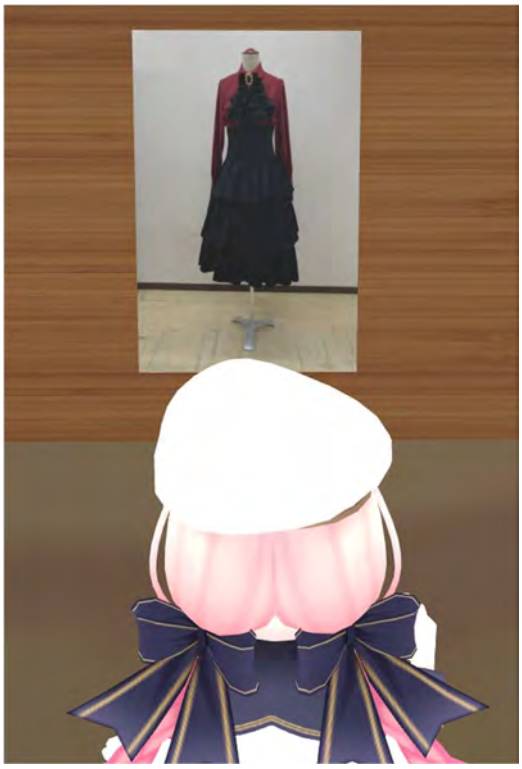


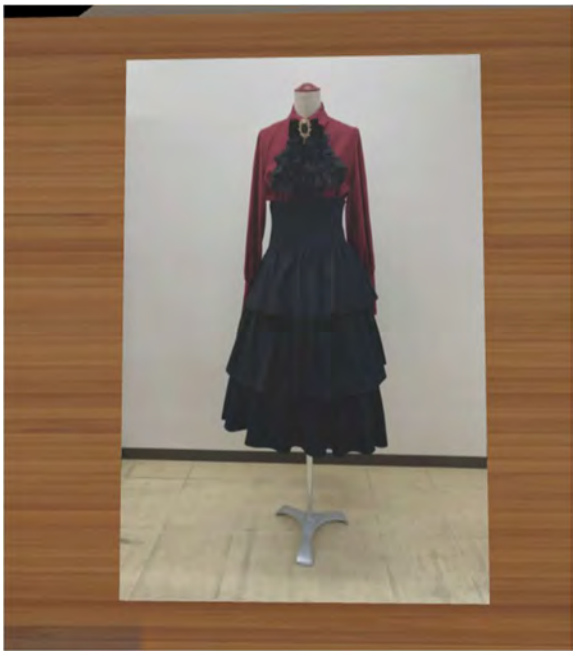
【生活服飾コース展示室】



教育的効果の想定

・自己表現の機会の確保
・他者からの承認体験による自己肯定感の向上
・作品を媒介とした間接的なコミュニケーションの促進
・他者の多様な価値観や表現への理解
・評価や成績を目的としない展示形式とすることで、
　生徒が安心して参加できる環境を整えている。





視点を変えたり、VR ゴーグルを使用したりすることで、まるで実際にその場で見ているような没入体験ができる

研究的意義

本ゾーンは、メタバース空間における「非対面・非言語的交流」が、不登校傾向にある生徒の心理的安定や社会的関与にどのような影響を与えるかを検証する場として位置づけられる。

② スクールゾーン（仮想学校型）



スクールゾーンは、教室や共有スペースなどを備えた仮想的な学校空間を再現したメタバースゾーンである。この空間では、雑談、グループでの簡単な活動、教員や生徒同士の交流などを、アバターを介して行うことができる。



ねらい

不登校傾向にある生徒にとって、「学校」という場所そのものが心理的負担となっている場合が多い。スクールゾーンでは、現実の学校とは異なり、参加・退出が自由である環境を用意することで、学校的な空間への段階的な再適応を目指している。参加・退出が自由であることに加え、教室で学ぶ生徒たちと日常的にかかわることができる環境を用意。

教育的効果の想定

・集団空間に身を置く経験の蓄積
・他者との距離感を自分で調整できる安心感
・日常的な会話を通じた社会性の回復
・学校という場に対する否定的イメージの緩和
・匿名性により、現実世界での人間関係や役割から切り離された状態で参加できる点も、心理的安全性を高める要因となっている。

研究的意義

本ゾーンは、メタバース空間が「登校か不登校か」という二項対立ではなく、その中間的な学習・交流の場として機能し得るかを検証する試みである。

【Siesta Lounge】（リラックススペース）
この部屋では、学習に役立つサイトへアクセスできるほか、博物館や美術館、善光寺の見学もできる。また、さまざまなイベントが用意されており、周囲の人とコミュニケーションを楽しむことができる設計になっている。



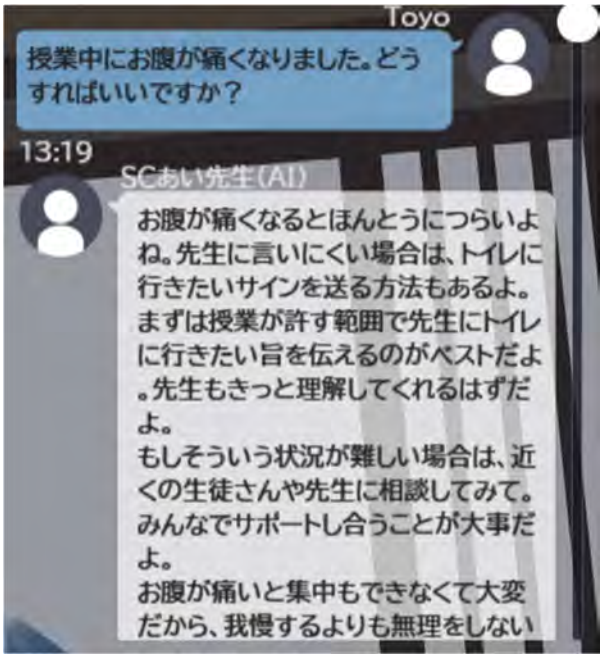






【カウンセリングルーム】





カウンセリングルームの設置の背景と目的は、相談の第一段階として AI に話しかけられる場を用意し、敷居を下げる。相談の内容によって人(近くの先生や医者)へと誘導する仕組みを取り入れることで、「お友達感覚として相談できる場所」として設定している。

---

③ キャリアゾーン(企業ブース型)

キャリアゾーンは、複数の企業に協力を依頼し、各企業が個別のブースを出展する形式で構成したメタバース空間である。各ブースでは、企業紹介、仕事内容の説明、働き方や職場環境の紹介を掲示し、アバターを介して見学をすることができる。



見たい、知りたい企業の前に行き、赤いボタンを押すとその企業のブースに訪問できる









企業ブースでは、企業の基本情報に加え、写真や動画を通して企業の魅力を紹介しており、壁に掲載された写真や紹介文から、各企業の公式ホームページへ移動することが可能となっている。

ねらい

不登校傾向にある生徒の中には、「将来像が描けない」「社会に出ることへの不安が強い」といった課題を抱える生徒が多い。キャリアゾーンでは、匿名性を保ったまま企業と接点を持つことができるため、対面の進路説明会や職場見学では参加が難しい生徒でも、心理的ハードルの低い形で社会や仕事を知る機会を提供できる。

教育的効果の想定

・実社会との接点を持つ経験の提供
・働くことへの漠然とした不安の軽減
・生徒が自ら質問し、情報を得る主体的行動の促進
・学校外の大人との安全な交流体験
・また、メタバース空間での企業ブースは、現実の合同企業説明会に近い構造を持ちながらも、参加・退出が自由である点や、匿名で質問できる点において、従来型のキャリア教育とは異なる価値を持つと考えられる。

研究的意義

本ゾーンは、不登校傾向にある生徒に対するキャリア教育の新たなアプローチとして、
メタバース空間の有効性を検証する試みである。
今後は、生徒の参加率、質問内容の変化、進路意識への影響、などを分析することで、メタバースを活用したキャリア教育の可能性を明らかにしていく。

事業検証

事業評価委員会まとめ

今後の展望



事業評価委員会まとめ

<table>
<tr><td>出席者</td><td colspan="4">【事業評価委員】（敬称略）
統括長　山岸建文
長野県教育員会　学びの改革支援課　田中篤
長野県教育委員会　心の支援課　太田一成
県民文化部県民の学び支援課　渡辺守
県民文化部こども若者局　次世代サポート課次世代支援係長　玉井慎市郎
長野市立櫻ヶ岡中学校　袖山賢治
長野県スクールカウンセラー　両川晃子（信州大学医学部付属病院心理師）
株式会社戦略デザインラボ　岡本洋平
オフィストモキ　大井知紀
豊野高等専修学校　学校長　奥田孝志　講師　山岸慎一郎
事業ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　鳥羽義広　事務局　山岸親子</td></tr>
<tr><td rowspan="4">委員会日程</td><td>回</td><td>日程</td><td>形式</td><td>内容</td></tr>
<tr><td>1</td><td>7月　3日</td><td>ハイブリット</td><td>事業概要の説明</td></tr>
<tr><td>2</td><td>10月　2日</td><td>ハイブリット</td><td>各事業の中間・進捗報告</td></tr>
<tr><td>3</td><td>1月22日</td><td>ハイブリット</td><td>各事業　今年度の総括</td></tr>
<tr><td colspan="5">事業ごとの成果と課題</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2">成果</td><td colspan="2">課題</td></tr>
<tr><td>企業連携</td><td colspan="2">企業理解の深化
メタバース内の企業ブースにより、単なるWeb検索よりも「仕事の中身・企業の特徴」を具体的に理解できる環境を構築。
中学生・高校生にも分かりやすい構成で、企業調べの教材として高評価

多様な職業人との出会い
経営者に限らず、介護・保育・飲食・YouTuberなど、生徒に近い職業人を講師に選定。生徒の実感に近い学びにつながり、進路観の広がりが見られた。</td><td colspan="2">認知度の不足（アンケートより）
学校・コースの認知度は向上したものの、依然として約半数程度に留まっている。地域企業や学校関係者への継続的な周知が必要。

連携の深化不足
現状は講演・体験中心で、「生徒と企業が一緒に何かを生み出す段階」には至っていない。
次年度は共同創造型の取組への移行が求められる。

継続体制の構築
委託事業終了後も継続するための、学校独自の実装・運営体制づくりが課題。</td></tr>
</table>

メタバース不登校支援	**３ゾーン（スクール・クリエイト・キャリア）の構築** 学習、創作、進路の各目的に応じた空間設計が実現。 生徒作品の展示や企業ブースなど、リアルでは難しい体験を提供。 **AI 相談導線の実装** カウンセリングルーム・保健室に AI を配置し、相談の心理的ハードルを下げる設計。 深刻な内容は対面支援につなぐ安全設計も確認された。 **「居場所支援」への明確な方向付け** 学習支援だけでなく、「安心していられる居場所」としての活用方針を確認。 3D 中心・低負荷での展開により、不登校傾向の子どもも参加しやすい設計。 **相談の敷居を下げる仕組み** AI による一次相談を設けることで、「いきなり人に相談する」壁を軽減。 軽い悩みから深刻な悩みまで受け止める入口として機能。 **対面支援への橋渡し** メタバースをゴールにせず、最終的にはリアルな支援につなげる方針を共有。	**目的説明の不足** 「この部屋で何ができるのか」が初見では分かりにくい。 音声・文字・ビジュアルによる案内強化が求められる。 **技術的制約** 再接続が必要なゾーン分割など運用上の工夫が必要。 **実証データの蓄積不足** 現時点では生徒参加が限定的で、効果測定はこれから。 来年度は生徒の反応・行動変化を数値や声で可視化する必要。 **生徒目線の反映** 大人側の設計が先行しており、生徒が「使いたい」「居たい」と感じる工夫が十分とは言えない。 アンケート等による継続的な改善サイクルが必須。 **環境格差への対応** 家庭の通信環境や端末差による参加困難への配慮が今後の課題。

事業評価委員からの声

不登校支援の取り組みについて

・メタバース空間により不登校の孤立を避け、心理的安全性を高める空間の提供という視点は、非常に意義があると感じました。

・非対面だけに頼りすぎるのは懸念

・様々な背景を持つ生徒たちに様々なプログラムを提案し、自分で選択できる、そしてそれを安心して追究できる取組は、生徒たちの自己肯定感を高め、社会的自立につながる取り組みと感じました。

キャリア教育について

・実際の就職につながればなおのことよいのではないか。
・高校の段階から多くの企業の取組内容を吸収できるのは素晴らしいと思います。
・今後は、不登校など困難を抱える子どもたちへの支援を先進的に行っている NPO や教育事業者による講演なども充実させてはいかがでしょうか。
・実際の話を聞くことを通して、自分自身に引き寄せて自らの生き方を考えている感想も見られた。単なる職業教育にとどまらない「生き方探究」はキャリア教育の本質であると感じた。ぜひ今後も、企業紹介や職業紹介に終始しない企業講演やキャリアゾーンの内容の充実を図っていただきたい
・簡単に企業の情報を選択、入手できること、また企業が参加し生徒にかかわって行く取り組み、双方向でのやり取りで職業意識の醸成につながっていくと感じました。職場体験学習など中学校で実施している場合も多いわけですが、コミュニケーションの課題や時間的制約等をクリアするよい方法であると感じています。
・キャリア教育は昨年に登壇させていただきましたが、生徒の学ぶ姿勢が非常によく、多くの企業さんにとってもメリットがあると思われます。

メタバースを活用した取り組みについて

・メタバースの可能性は感じるが、現実世界からの逃避にならないように気を付ける必要もあるのではないか。
・前回までよりも、ebord との提携や AI チャットの導入など可能性の幅を非常に感じました。県の施策としても今後参考にさせてください。
・セキュリティ面や、生徒同士のチャット等によるトラブルが生じた場合の対応は予め整備しておくべきと感じました。また、匿名性の高さや名前を簡単に変更できることもあり、「なりすまし」などにも対処できるような仕組みが必要と思料されます。
・ぜひ生徒や教員の声を聴き細やかに反映する運用をお願いします。
・可能性を感じた。一方で、子供たちの多くは日々ゲーム等においてバーチャルの空間を味わっており、チャット機能等を用いたやり取りにも慣れている子も多い。そうした市販のゲーム等におけるバーチャル空間は、子供たちの刺激を喚起する仕掛けや工夫も存分になされている。そうした空間に慣れている子供たちが自らの意思で「明日も Vket のメタバースに入ろう」と思うにはどうすればいいのか？やはり、子供たちが何を求めているのか、子供たちの興味や関心はどこにあるのか？を探っていく必要があるのではないかと思う。可能ならば、今回のメタバース空間の構築を子供と共に進めることはできないだろうか？
・同一の学校内ならば問題ないと思うが、匿名性を担保したメタバース空間で対面支援につなげる方法も大事な兼問すべき視点と感じています。生徒が興味を持って参加できるルームを自前で作っていくことのハードルは高いと感じています。
・構想自体は大変良いと考えました。その上で、利用者側の手間が大きくなることが予想されますので、その点をどう解決していくかが課題となると感じました。

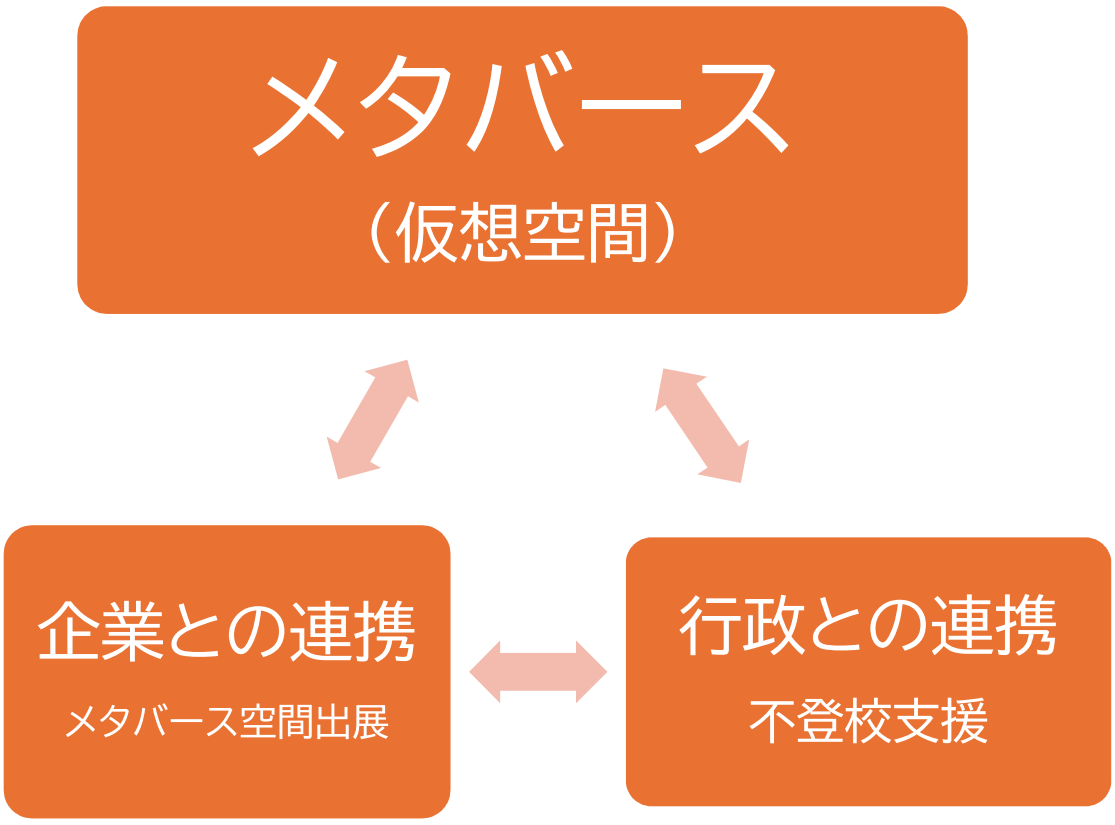
今後展望

令和6年度
- メタバース空間の構築（成果物の展示）
- 行政との連携（事業評価委員会への参加）
- 企業との連携（実証授業　認知度アンケート）

令和7年度
- メタバース空間の拡張（不登校生に限らないメタバース空間の活用）
- 行政との連携強化（不登校生徒対応における意見交換）
- 企業との連携（実証授業、生徒の職業体験、生徒会と企業の連携）

令和8年度
- メタバース空間の完成
  仮想空間と現実空間の融合・生徒参加による空間の作成

この事業で目指すもの



令和７年度　文部科学省

高等専修学校における多様な学びを保障する先導的研究事業

事業内容「都道府県との連携による高等専修学校機能強化の先導的モデル構築プロジェクト」

事業名「県・地域企業との連携による企業関係者の積極的な学習への関りを通して
多様な学びに対応できる指導プログラム構築」

実績報告書

令和8年２月

連絡先　389-1105　長野県長野市豊野町豊野 1344
学校法人豊野学園　豊野高等専修学校

℡:026-257-2127　　FAX:026-257-3970

●本書の内容を無断で転記、転載することは禁じます